

から元祿五年十二月まで、著者が奥小姓勤務中の日記である。一に葛巻昌興日記とも名づける。

カツラマキマサオキユウテイテン 葛巻昌興有頼傳 一冊。富田景周著。巻初に漢文を以てその傳を記し、次に有頼の作つた詩歌を載せ、又竹田忠張の送葛有頼論能州の詩、青地禮幹の弔葛有頼死論中の詩等が附載せられて居る。

カツラマキマサトシ 葛巻昌俊 幼名藤十郎、後喜一郎・隼人。近江の人、元大野木氏。幼時父主計介に別れ、母と共に外祖淺見新右衛門に從うて越前に徙り、母の再醮に伴はれて葛巻十右衛門の養子となり、次いで家を襲いだ。十六歳の時前田利長に守山に仕へて百五十石を賜はり、文祿二年及び慶長四年に各二百石を加増し、大聖寺の役に從軍して二百石を加へ、翌年七月又五百石を増し、合計千二百五十石となつた。昌俊大坂前役に從軍して使番となり、後役には矢疵^ニ所を受けたが進んで合櫓し、功によりて五百石を加増せられ、寛永八年再び前功に因つて二千二百五十石を加賜せられ、計四千石を受け、小將頭・旗奉行に累遷し、人持組に陞り、十六年一たび退老したのを、前田光高復擧げて富山城の守將とし、正保元年家老に進め、別に養老俸として千石を賜はり、光高の卒後利常に小松に侍し、慶安三年又百石を加へ、四年七月十七日歿、享年七十七。

カツカト

六日その地で自殺した。子佐六郎昌順、祖父内藏太昌成の遺知の内三百石を賜はつたが、文化十年四月七日また自殺して斷絶した。

カツラマサナホ 桂正直 猪山吉藏の次子、通稱圭三郎、初諱眞直天保十一年十一月九日生まれ、藩儒石黒辰三郎の家を嗣ぎ、明倫堂訓導となつた。圭三郎常に愛國の士と交り、好んで時事を談じた。時に國家多事、内外の形勢漸く切迫したから、藩は圭三郎に命じ、江戸に往きて昌平叢に學び、傍ら形勢を偵察報告せしめた。既にして文久三年圭三郎は郷に歸り、小川幸三等と共に勤王を唱へたが、元治元年七月前田慶寧の退京した際、急に海津に赴いて事情を探り、歸路府中に於いて藩吏の爲に捕へられ、その家に鎖せられたる後、十月公事場に禁錮の刑を宣告せられた。明治元年三月大赦によつてその罪を赦されたが、二年本多政均暗殺事件と交渉があつた爲、東京に逃れて姓名を桂正直と改め、四年六月士籍を復せられた。爾來憾何不遇、大正元年十二月六日七十四歳を以て歿した。

カツヲウチ 勝尾氏 鑄象眼師。勝尾永次通稱文治は、勝木豊平永光が多病家業に従はざるを以てその業系を繼いだ。天明四年加賀藩の御細工者に列し、養子猪三郎後勳兵衛永秀をして家を襲がしめた。弘化二年永秀御細工者小頭に進み、安政三年喜三郎亦入つて統を受け御細工者となつたが、王政維新に際して業を廢した。

カツヲザキ 勝尾崎 鹿島郡能登島なる緩目部落の東方にある岬。

カツヲチヨウ 勝尾町 金澤の町名。藩士勝尾氏の邸地があつたに因る稱である。

カツヲノブヤ 勝尾信哉 通稱左大夫吉之進・半左衛門。猪右衛門信重の養子として寶永三年遺知二百石を受け、組外に列し、表小將・御使番を經、寛延元年二百石を加へ、遂に御馬廻頭に至り、寶曆十二年隱居して希齋と號し、明和五年十二月六日七十七歳を以て歿した。

カツヲノブヤス 勝尾信處 通稱吉左衛門・半左衛門。養父忠左衛門篤信の遺知四百石を襲ぎ、安永六年表小將から次第に昇進し、享和三年二百石、文化七年五百石を加へて人持組に列し、文政十二年隱居して好山と號し、料二百石を食み、天保三年十月十七日歿した。七十歳。

カツヲハンザエモン 勝尾半左衛門 父は喜多尾崎左衛門といひ、濃州楡井の住人であつた。半左衛門初め稻葉伊豫守に仕へ、その命によつて勝尾氏に改め、天正十八年前田利長に仕へて二百石を領し、御馬廻に班した。慶安四年歿。子孫世々藩に仕へる。

カトウウネメ 加藤采女 長氏の家臣。紋兵衛の子。組頭役。寛永十九年主君連頼に諫書を呈して剃髮し、京師黒谷に隱棲して意安と號した。後再び召されて歸り、正保四年正月二百石を加へて六百石を領し、明暦二年九月二日四十九歳を以て頓死した。その子に主計があつた。

カトウカゲヨシ 加藤景慶 通稱甚五太夫。正徳七年御歩に召出され、享保十九年奥村内記の奥力となり、明和四年組外並に班して百石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

カトウキヨユキ 加藤潔幸 通稱半左衛門。明和二年父興三左衛門永昌の遺知八十石を受

け、定番馬廻に班し、天明五年三十石を増し、寛政三年賈銀事件によつて揚屋に收容せられ、七月朔日七十四歳を以て歿した。

カトウクニサト 加藤都里 通稱興三吉・宗左衛門。宗兵衛重澄から六代。祿三百石、大小將組に屬したが、明和六年四月十一日同苗十兵衛と喧嘩殺害し、知行を召放された。

カトウゲンコウ 加藤玄好 御醫師として十人扶持を受け、享保八年歿。子玄叔その遺跡を襲ぎ、十五年新知百五十石を受け、玄壽・正悦好生・邦安方定相繼いだ。

カトウコウ 加藤恒 字は久也、松塙と號した。父を豊房といひ、藩學教授兼侍讀であつた。恒夙に明倫堂に入りて業を修め、次いでその訓導となり、明治元年新たに俸を給うて遊學を命ぜられた。恒乃ち長崎に赴き、又東上して昌平叢に居ること三年、歸りて世子前田利嗣の傅となり、幾くもなく肥筑薩隅の間に歴遊し、置縣の後擢でられて少屬に任せられ、大屬に進み、學務課長に補せられた。八年職を罷め、家塾を金澤品川町に開き、鐵術館と號したが、十二年之を領し、同年石川縣會議長となり、尋いで能美郡長・金澤區長に轉じ、共に治績があつた。十四年前田家に入つて家扶と爲り、後家令に進み、二十二年利嗣に従ひて歐米に巡遊し、三十二年三月六日病んで歿した。年五十七。恒文章を善くし、書畫刀劍陶磁の鑑賞に長じ、餘暇あるときは一室に入り、孜孜として撰著を事とし、北藩事實文録・奎文餘滴・近世文章類選・陶器叢書・陶磁考草・加賀越中陶磁考草・加賀國陶器史料・兩毛紀行・淳正公米歐巡回日記等がある。